KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

# 学習意欲を高める指導法：コミュニケーション能力育成の視点



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部<br>公開日: 2019-09-18<br>キーワード (Ja): コミュニケーション能力, 学習意欲, 習熟度別クラス, 緊張感<br>キーワード (En):<br>作成者: 小栗, 裕子<br>メールアドレス:<br>所属: 関西外国語大学 |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.18956/00007884 |

関西外国語大学 研究論集 第110号（2019年９月）
Journal of Inquiry and Research, No.110（September 2019）

# 学習意欲を高める指導法

## ── コミュニケーション能力育成の視点 ──

小　栗　裕　子

**要　旨**

コミュニケーション能力重視の英語教育にはインプットも重要ではあるが、アウトプットやインタラクションも不可欠である。この場合、緊張感や不安感が生じることが予想されるが、ペアやグループワークをすることにより、学習意欲を高めることが可能になる。また、クラス内での雰囲気も大切な役割を果たす。本稿では実際の指導法を紹介しながら、それらのどこが効果的だったのかを考察する。さらに、学習者のアンケート結果から緊張感を軽減して学ぶためには少人数の習熟度別クラスを望んでいることが明らかになった。これは中学校での英語教育にも当てはまる。

**キーワード：**コミュニケーション能力、学習意欲、習熟度別クラス、緊張感

## １．はじめに

近年日本の英語教育は、コミュニケーション能力育成が中心になっている。そのために教室では当然多量のインプットが必要になるが、アウトプットやインタラクションも不可欠である。そうしたコミュニケーション活動には多くの不安や緊張感を伴うことが予想される。白畑他（2009, p.16）によれば、第二言語や外国語教室における主な不安には３つのものがあり、それらは ① 他人/教師とうまくコミュニケーションできるだろうかという不安、② 他人から自分の外国語能力を低く評価されてしまうのではないかという不安、③ テストで良い点数が取れるだろうかという不安である。一般的にこれら３つの不安が外国語学習を阻害すると言われている。

そこで本稿では英語教育、特にコミュニケーション活動時に教室内で生じる不安や緊張感に焦点を当て、学習者と教師の視点から考察をする。そして、それらを軽減することによりコミュニケーションを促進し、学習意欲を高めるための指導法を紹介する。

## 2．コミュニケーション能力とは

最初に「コミュニケーション能力」について考えてみたい。2008年、2009年にそれぞれ改訂された中学校と高等学校の「学習指導要領」外国語では次のような目標を設定している。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

ここで用いられている「コミュニケーション能力」とは、英語で“communicative competence”と言われ、多くの定義が試みられてきたが、英語教育の分野では1983年の Canale のモデルが著名である。これは４要素理論と言われ、次の４つの能力から構成されている。① 文法能力（grammatical competence）: 語彙、語形成、統語、発音、綴りなどの言語体系を正確に操作する手続き的知識　② 社会言語学的能力（sociolinguistic competence）: 言葉が使用される社会的な文脈を理解し、場面や目的、話し手と聞き手の関係などの要因に応じて適切に言葉を使う能力　③ ディスコース能力（discourse competence）: 発話を適切に組み合わせてテキストを構成し、まとまりのある内容を伝えたり、文脈から話し手の意図を的確に判断する能力　④ ストラテジー能力（strategic competence）: コミュニケーションに支障ができた場合やより効果的にメッセージを伝える為に用いられる、その場に応じてとられる方略の能力で、①から③の能力の不備を補うのが④の能力だと米山（2011, pp.56-57）は述べている。

林（2011, pp.96-97）は、学習指導要領の中に明確に「コミュニケーションとは何か」が定義されていないことを指摘し、中学校の段階では「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の４技能をバランスよく育成することの必要性が強調されているのみだと述べている。そして、コミュニケーションとは自分の考えや気持ちを伝えるだけの一方的な行為ではなく、聞き手の立場や考え方の理解の上に成り立つ相互作用であること、さらにこの相互作用を通してお互いを理解できることこそがコミュニケーション能力の育成であることを強調している。換言すると、コミュニケーションには相手があり、その相手の背景には文化が存在し、その理解をも含むものでなければ、コミュニケーション能力の育成は充分でないということになる。

望月（2018, pp.113-114）も、「コミュニケーション能力の育成」の章でコミュニケーション

能力の下位能力を詳細に説明した後「文法の正確さだけを重視する英語教育では、コミュニケーション能力のごく一部しか育成しておらず、他の側面にも配慮する必要があることに、改めて気づかされるであろう」と述べ、言語を実際に使用できる能力には文法能力以外に社会言語能力、談話能力、方略的能力が必要だと訴えている。本稿で使用している「コミュニケーション能力」とは上述の４つの能力を指している。

## ３．学習者の視点

### ３．１　緊張感を軽減するために

Price（1991, pp.105-107）は、大学でフランス語を受講している学生を対象に「外国語のクラスで最も悩まされることは何か」の問いにほぼ全員がクラスメートの前でフランス語を話すことだと答えていると記している。そして、彼らが喋っていて他の学生に笑われたり、間違った発音だったらどうしようという心配を絶えず持っていることを付け加えている。また、これらの心配を取り除くために教師は定期的に間違いをすることの大切さを教室で話すべきだと述べている。最後に Price の不安や緊張感の多い学生は、教室内でそれらを軽減するための方法として以下のような５点を希望している。

1. Small classes or pair work would be more comfortable.
   （少人数クラスやペアワークの方がより安心できる）
2. Getting to know the other students helps learners to feel more relaxed by reducing the fear of being ridiculed.
   （クラスメートと知り合いになることは、嘲笑される心配が少なくなりリラックスした気分になるのに役立つ）
3. Students need to be given a great amount of encouragement and reinforcement.
   （学習者には多くの励ましと再強化が必要である）
4. Students need to be encouraged to make mistakes and should be reminded regularly of the instructional value of mistakes.
   （学習者には間違いを奨励し、間違いから学ぶことの意義を定期的に思い出させる必要がある）
5. Instructors should be more like a friend to help students to learn and less like an authority figure making them perform.
   （教師は学習者に目標言語を使わせる権威者のようではなく、学びを支援する友人のような存在であるべきだ）

### ３．２　クラスサイズと習熟度別クラス

大学での習熟度別クラスは今やある程度普通になっていると言ってよいだろう。大学英語教育学会実態調査委員会（2007）によると、4386名の回答者のうち2481名が習熟度別クラスを受講した経験があり、そのうち85% が肯定的で15% が否定的だったという結果を得ている。肯定的な理由として、「同じレベルなので学習しやすい」（56%）と「教材がレベルにあって勉強しやすい」（18%）と答えている。また、「高いレベルに入れるよう意欲が増した」が10% いたことは動機づけの観点からみて興味深い。さらに、習熟度別授業を受けていない学生2794名（受けた学生も含む回答になっているが）のうち、「習熟度別のクラスを望む」学生が39% 近く、「望まない」学生が25%、「どちらでもよい」が37% となっている。これは既に10年以上前の調査結果ではあるが、大学での英語教育を考える上で有益なコメントではないだろうか。

この調査はまた初級、中級、上級などの習熟度別クラス分けをすることに対する賛否についての問いもあり、回答者4386名のうち「賛成」33%、「やや賛成」26% と約60% が習熟度別クラス編成に対して肯定的回答をしている。「やや反対」と「反対」の合計は15% と少なく、「どちらでもない」が26% あった。調査はさらに「英語クラスの人数はどれくらいがよいと思いますか」の質問に「11～20人」が41%、「21～30人」が25%、そして「1～10人」が23% と続く。20名以下のクラスが理想だと答えた学生は全体の64% と高く、少人数を希望していることが明確になっている。

それでは、中学校・高等学校の習熟度別クラスの現状はどうであろうか。2019年度２・３・４回生で「英語科教育法１」を受講している学生26名に彼らが受けた授業形態について聞いてみた。これは丁度授業中に教師の役割としてクラスの雰囲気作りが非常に重要だという点を話し合っていた時で、習熟度別クラスが話題に上り、予想以上の学生が中学校や高等学校でこのようなクラスを体験し効果があったと述べていたことから、現状を把握するためにアンケートを行ったという経緯がある。

**中学校・高等学校での習熟度別クラス**

| | 習熟度別クラスを受講 | | 習熟度別でないクラスを受講 |
|---|---|---|---|
| 中学校（N26） | 8 | | 18 |
| | 非常に効果があった　4 | 効果があった　4 | 習熟度別クラスをやってほしかった　7 |
| 高等学校（N26） | 6 | | 20 |
| | 非常に効果があった　1 | 効果があった　5 | 習熟度別クラスをやってほしかった　6 |

全体数が少ないので一般化はできないが、中学校では全体の３割が習熟度別クラスを体験し、それを全員が効果的だったと回答していることに注目したい。また、習熟度別でなかった学生

の「習熟度別クラスがあれば良かった」が４割近くいることは見逃せない。高等学校での習熟度別クラスは23%と中学校のそれと比較するとやや少なく、効果的だったと回答をしているが、非常に効果的だったが多かった中学校と比べると低くなる。高等学校での「習熟度別クラスだったら良かった」は３割近くいるが、これも中学校よりは若干少なくなっている。

「習熟度別クラスだったら良かった」と回答した学生の自由記述には考えさせられる内容も多くあるので、それをそのまま紹介する。

「もし習熟度別クラスがあれば、英語に対する不安などがもっと早くなくなっていたのではないかと思います。」

「少人数になり、発言などが増えるので、習熟度別は良い取り組みだと思います。」

「自分に合ったレベルの授業が受けられるので、あれば良かったと思います。」

「違うレベルの人がいたら、苦手な人は得意な人に笑われるとか、恥ずかしいとか思う人もいると考える。」

「クラス人数が少ないと先生のケアも届きやすいため、習熟度別は効果的だと考える。」

### ３．３　コミュニケーション活動

本学で筆者が2018年度担当していた１年生28名のクラスに無記名によるアンケートを実施し、英語の授業でどのような時にやる気が高まるのかを聞いた。彼らは全員が小学校の教員を目指していて、教室内では全体が積極的に授業に参加しようとする姿勢が強く感じられた。質問内容は「中・高での英語の授業でどのような時皆さんのやる気は高まりましたか」と「この授業ではどのような時にやる気が高まりますか」をそれぞれリスニングやライティングのように技能別に尋ねた。

中・高では個人の上達が記述の中心で、例えばリスニングの得点が上がった時とか、ALT（ネイティブ）の先生に褒められた時というコメントが多く見られた。また、文の読解ができた時とか、自分の言いたいことが書けた時、あるいはテストの点が高かった時にやる気が高まったと述べている。これらは大学受験を控え、当然なのかもしれない。

一方、大学での回答には少し違った傾向が表れていた。受講科目は「Speaking & Listening」と「Reading & Writing」で、週に２回ずつ開講されたクラスである。個人の上達が学習意欲を高めると書いている回答も多く見られたが、それ以上にみんなの前でプレゼンテーションする時、人前で話したことが通じた時、ペアやグループで意見交換をする時など、発話をすることがやる気を高める結果になったと記述しているものが目立っていた。ライティングでも自分の書いたことをみんなの前で発表することが楽しいと書いている学生が多数いた。彼らは将来教員になって、英語も教えることになるので、当然英語を話したいという気持ちは他の学科の

学生たちよりも強いのかもしれないが、クラスでプレゼンテーションをする時や自分の書いた英文を30名近い同級生の前で発表することに不安感や緊張感はなかったのだろうか。

## 4．教師の視点

### 4．1　教授法

TESL（Teaching English as a Second Language）の分野では「間違いはすぐに正す」という行動主義心理学と構造主義言語学の影響を大きく受けたAudio-Lingual Method、ALM（口頭教授法）の導入後、1970年代から新しい教授法が次々に提唱されている。そのどれもが発話の不安感や緊張感を軽減し、安心して学ぶことのできる環境を提供することを主張している。

Brown（1994, pp.95-99）は、それらの教授法を認知的で情意的だとして次のように紹介している。

1．AsherのTotal Physical Response、TPR（全身反応法）は、子供が母語を習得するように話す前に聞く力を身につけ、それを動作と連動することで新しい言葉を産出する不安感や緊張感を取り除く。

2．LozanovのSuggestopedia（サジェストペディア）では、内容の定着を図るためにリラックスした心理状態での学習が重視され、学習者はソファーに座りバロック音楽を聞きながら、教師の朗読に耳を傾ける。外国語をのびのびと学ぶことのできる環境を提供することがこの教授法のポイントになっている。

3．Curranが提唱したCommunity Language Learning（コミュニティ・ランゲージ・ラーニング）はCounseling Learning Methodとも呼ばれ、カウンセラーとしての教員とクライアントである学習者の関係から成り立っていて、両者の間には信頼があり、教室は安心感が生まれることで言語学習が促進される。

これらの教授法は、どれも不安の少ない状態で外国語を習得するという点で日本の英語教育の参考になるであろう。

### 4．2　動機づけ

新多（2018）は「教室の雰囲気はどのように生まれるのか」の中で、３つのクラスを例に出し、同じことを教えていてもクラスの雰囲気は全く異なってしまうことを指摘している。そして、この雰囲気が学習者の動機づけに影響を与えている可能性があることにも言及している。そこで筆者が本学で教えていた上述のクラスの特徴と指導法について教師の視点から探ってみた。

クラスの特徴

1．全員が小学校の教員になりたいという目標が同じ
2．高等学校と比較すると出身地がさまざまで話題に広がりがある
（発表を聞かないとわからないので真剣に聞くし、興味がわく）
3．高校時代に１年以上留学していた学生が数名いて、彼らが授業中にリーダー的役割を果たしている（誰もボランティアがいない時にさりげなく手を上げている）
4．28名の構成は女性16、男性12とある程度のバランスが取れている

クラスでの活動

1．全体で発表する場合でもまずペアで一度話したり、読んだりする。その後時間があれば４名で、そして全体での発表へとつなげる
2．発表する内容はできるだけ身近な日常的に興味・関心のある話題とする
例えば、自分の町で自慢できることは何かとか、お勧めの訪問場所や旅行したいアジアやヨーロッパの国はどこかなど
3．プレゼンテーションの内容や作文は選択肢を与えるか、自分で選べるトピックとし、自由度を持たせる
4．全体で答え合わせをする時にもまずはペアで確認をする時間を設ける

新多（2018）は良いグループの特徴の一つとして強い「結束性」をあげているが、このクラスにも授業中に助け合っている姿が多くみられた。例えば、発表をしたクラスメートには必ず拍手をして、いい内容だったという意思表示をしたり、お互いにファーストネームで呼び合ったりして、積極的に相手と交わろうとする態度がうかがわれた。また、間違っても恥ずかしくない雰囲気も出来上がっていた。

新多（2018, p.17）は、クラスはまるで生き物のようにダイナミックに変化するが、教師と生徒、生徒同士の相互作用がその基盤になっていると述べている。そして、日々の授業がどのように影響しているのか注意深く観察し、経験を蓄積することにより授業の雰囲気を調整する力が磨かれるのだと結んでいる。

上述のクラスは30名近くいるが、同じ目標を持った集団であること、将来必ず英語が必要なことで結束性が強いこと、それに加えてアウトプットやインタラクションの際に、まずはペアやグループでするなどの不安感を極力軽減させたことで、上に述べたような回答が多く出たと言えるのではないだろうか。2018年度学期末に実施された授業評価集計の「この授業によって、知的関心が高まり、学ぼうとする意欲がかき立てられた」及び「この授業を受けて、知識が深まり、能力を高めることができた」は90％の学生が「強くそう思う」（58%）と「そう思う」

（32%）と答えている。この高い数字からもクラスの「結束性」の影響は明らかである。

## 5．おわりに

コミュニケーション能力を育成するための発話活動には多くの不安感や緊張感が伴っている。それらを少しでも軽減し、コミュニケーション活動を促進し、学習意欲を高めるための方法を学習者の視点からまとめると次のようになる。

1．習熟度が同じだと安心感が生じる
　これは特に中学校や大学でのクラス編成に当てはまる。習熟度別クラス分けにより、より高いレベルに入れるよう意欲が増す学習者が存在する。また、同じレベルだと不安感が少なくなる。
2．クラス内の結束性（まとまり）が高いとコミュニケーション活動がしやすくなる
　お互いをよく知るための活動を学期始めに多く用いることにより、クラスに結束性が生まれ、それが学習意欲向上に繋がる。
3．クラスサイズは20名程度が適当である
　少人数クラスによりインターアクティブな言語活動への参加がより可能になる。

**謝辞**

本稿は2018年８月８日に開催された本学大学院の「英語教員のための夏期リフレッシャーコース―英語教育の理論と実践の統合をめざして―」のハンドアウトを大幅に加筆したものである。アンケートに快く回答してくれた受講生の皆さんに心より感謝いたします。また貴重な助言をくださった査読の先生方にも深く感謝申し上げます。

## 参考文献

新多了（2018）「教室の雰囲気はどのように生まれるのか」『英語教育』67,（3）, 16-17.

Brown, H. D.（1994）. *Principles of Language Learning and Teaching*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall, Inc.

大学英語教育学会実態調査委員会（2007）『わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合研究―学生編』大学英語教育学会（JACET）.

林桂子（2011）『MI理論を応用した新英語指導法』東京：くろしお出版.

望月昭彦 編著（2018）『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』東京：大修館書店.

文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説』.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/gai.htm（2019年４月29日引用）

文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領解説』.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/attach/1401045.htm（2019年４月29日引用）

Price, M. L.（1991）. The subjective experience of foreign language anxiety: Interviews with highly anxious students. In E. K. Horwitz & D. J. Young（Eds.）, *Language Anxiety*,（pp.101-108）. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall, Inc.

白畑知彦・冨田祐一・村野井仁・若林茂則（2009）『英語教育用語辞典』東京：大修館書店.

米山朝二（2011）『新編 英語教育指導法事典』東京：研究社.

（おぐり・ゆうこ　外国語学部教授）